

マザーテレサの冒険

絵 ピエロ・ベントゥーラ
文 ジアン・パオロ・チェゼラーニ
訳 女子パウロ会



マザーテレサの冒険

絵 ピエロ・ベントゥーラ

文 ジアン・パオロ・チェゼラーニ

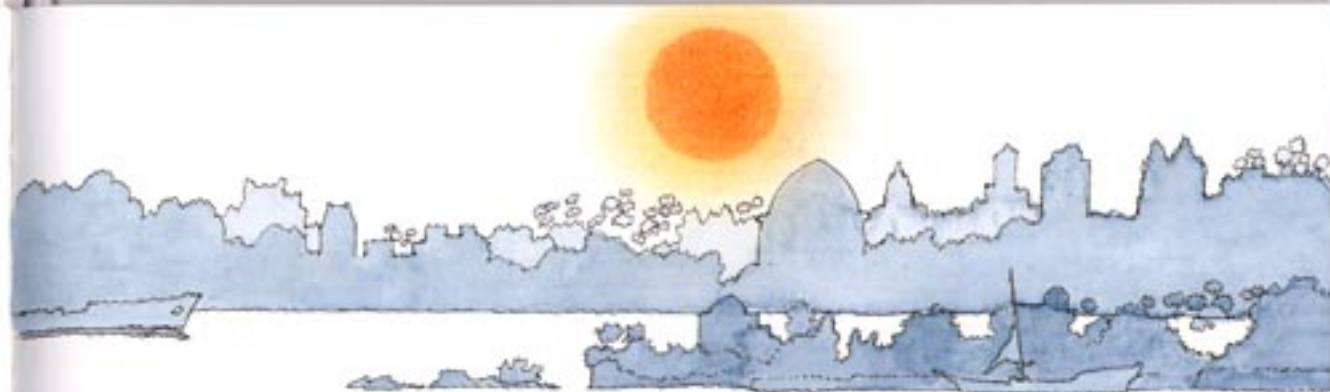
訳 女子パウロ会



女子パウロ会

もくじ

- インドの二つの顔 3
むずかしい国 4
将来のゆめ 6
小さな修道女 8
コルカタのまずしい人びとのなかで 10
神の愛の宣教者会 12
いつも走って 14
愛の奉仕を車で 16
世界を心にいだいて 18
神の愛の兄弟宣教者会 20
だれがこのようなことをできたでしょうか？ 22
ノーベル平和賞 24
友だちとしての教皇さま 26
最後の冒険 28
聖人！ 30



インドの二つの顔

1929年1月のはじめ、ロレット^{シスター}修道会のふたりの志願者がヨーロッパからインドへ向かう船の甲板にすがたをあらわしました。スエズ運河、紅海をとおって、インド洋をわたり、ベンガル湾に到着しました。長い航海のあいだにクリスマスをお祝い、船のなかでクリスマスのミサがささげられました。

ふたりのうちの若いほうの志願者は名まえをアグネスといい、活発で、きらきらとかがやく目をもっていました。アグネスは、何年かあとになって、世界じゅうからマザーテレサとよばれるようになるで

しょう。

船はベンガル湾のチェンナイにつきました。ナツメヤシの実をいっぱいにつけた高い木々、ゆたかな自然、そうごんなヒンズー教の寺院など、アグネスは、はじめて見るインドの国にとてもみりよくを感じました。それとともに、この国のまずしさにびっくりしました。不幸やさいなんがこの町をおおっているようです。このときのおどろきはテレサの生涯に大きなえいきょうをあたえることとなるでしょう。



むずかしい国

マザーテレサの本名は、アグネス・ゴンジャ・ボヤジュです。1910年8月26日、いまのマケドニア共和国の首都スコピエに生まれました。マケドニアのあるバルカン半島の国々は、たくさんの民族や宗教が共存しなければならなかったために、いつもあらそいがあったところです。

テレサの両親はアルバニア人でした。父親はニコラ、母親はドラナといい、ひとりの兄とひとりの姉がいました。父のニコラはお金もちの商人で、おさないアグネスは、おだやかな、あたたかい家庭で成長しました。一家は、昔からのカトリックの信仰をもっていました。

しかし、1919年、アグネスが9歳のとき、家族にとつぜん大きな不幸がおそいかかります。考えもしなかったことですが、父のニコラがなくなったので

す。父はアルバニア愛国運動家として熱心に活動していましたが、そのためにいのちをうしなったのです。その日、となりの国の首都ベオグラードで大きな集会有り、朝、元気で出かけていった父のニコラは、死にそうになって家に帰ってきました。そして、医者の手あてのかいもなく、45歳でなくなったのです。おそらく毒殺されたのでしょうか。

父がなくなったあと、子どもたちは母の庇護のもとに、ますます家族のきずなは深まりました。母ドラナはとてもしっかりした女性で、自分の子どもたちのほかに、夫をなくしたひとりの女性とその子どもたちを引きとって世話もしていました。生涯の道を進むために、アグネスはこのように母から受けた教育をとて強く感じていました。



将来のゆめ

父のニコラがなくなって、母と子どもたちはまえよりもいっそう深く神さまを信じるようになり、教会に熱心に通いました。アグネスと姉のアガタは教会の合唱隊に入り、とてもきれいな声で歌い、ふたりは「ナイチンゲール」とよばれるほどでした。

アグネスは、12歳のときに修道女（シスター）になる希望をいだきはじめました。みんながアグネスに、「いつ修道院に入るの？」と、なんどもたずねましたが、彼女はいつも自分のむねにとどめて、そ

れについて話したがりがませんでした。

家族をはなれて修道院に入るまで、アグネスは子どもシスターを見たことがなかったのです。でも、彼女の近くには、青少年たちを集めて、詩や文学、演劇などの作品を読みながら、医学や科学を教えている教会の神父さまたちがいました。

1924年ごろ、旧ユーゴスラビアの神父さまたちが、インドのベンガル地方に宣教師として行っていました。インドでの宣教はとてもむずかしいもの

でしたが、また、心をひきつけるものでした。神父さまたちはそこでの働きや、自分たちとはちがった国のめずらしいニュースをこまかく書いて故郷におくっていたのです。小さなアグネスも遠いふしぎな世界に強くひかれ、宣教師たちの働きをすばらしいと感じていました。このことは、アグネスの心にいだいていた将来のゆめをはっきりとしめすこととなるでしょう。それは宣教女になりたいというゆめでした。



小さな修道女

修道女になろうと決心することはやさしいことではありません。アグネスは家族ととても深くむすばれていました。宣教女は、もう家族とも会えない、国にも帰れないというおそれがありました。アグネスの少女時代には、外国に旅行するということはとてもむずかしいことでした。修道女が家族をほうもんするために外国から自分の国に帰ることは、たいへんまれなことだったのです。

小さいアグネス（彼女はほんとうに小さな背丈でした！）が、修道女になりたいといったとき、母のドラナは、「ノー」という最初のひとことで反対しました。アグネスは活発で、文学に熱中し、日ごろ作家になるという望みについて話していたのです。「このような少女に修道生活ができますか？」母はそういって、一日じゅう自分のへやに入ったまま、出てきませんでした。でも、最後にはむすめを祝福し、修道女になることをゆるしました。

アグネスの人生はきまりました。何年かたって、ひとりのジャーナリストが、母親に、「むすめが修道女になって、自分の家や子どもをもたないということをごんねんだと思いませんか？」とたずねました。「ええ、たしかに。でも、これは、わたしたちが神さまにささげるプレゼントです」と母は答えました。アグネスが入った修道会には、たくさんの修道女や、めんどろを見ている多くの子どもたちがいました。その人たちこそむすめの家族なのだ、と母は思いました。

1928年、アグネスは、アイルランドに本部があるロレット修道会に入会することをきめました。18歳になったばかりでした。ロレット修道会はインドのベンガル州で教育活動をしていることを知ったからです。もうひとり同じ修道会に入ることを選んだ少女とともに入会への旅がはじまりました。

アイルランドのダブリンの修道院で総長に会い、すぐふたりの少女は志願者のべールを受けました。

1928年12月インドに向けて船出しました。ふたりはこれからおとずれるインドの地についてさまざまに空想をめぐらしました。新しい生活がはじまろうとしていました。



コルカタのまずしい人びとのなかで

アグネスは、1929年1月インドにつき、ベンガル州北部のダージリンの修練院（修道女になるための養成をするところ）で教育を受けました。ヒマラヤ山脈が見える美しい高原地です。20歳で誓願（神さまに身をささげるちかい）をたて、テレサという名まえをいただき、シスターテレサとなりました。

そして、コルカタのロレット修道会の学校で教えることになりました。日曜日には見すてられた人たちが住む町のまずしい地域に行きました。

ある日、ひとりの男が大きなつつみをもって修道会にやってきました。そのつつみから二本のかれた木のえだのようなものが見えています。テレサはそのすいじゃくして、いのちの消えかかった赤んぼうの足を見てびっくりしました。テレサはいいいます。「その男の人は、自分の子どもだと知られるの

をおそれていました。ですから、「この子は草むらにすてられていた」といいました。わたしのむねはしめつけられました。かわいそうな赤ちゃん！ よわくて、ぜんぜん目が見えないのです。わたしは赤ちゃんをうでにだき、エプロンでつつみました。赤ちゃんは第二のお母さんを見つけたのです！」

このけいけんは、テレサの未来をきめるできごとになりました。このような不幸な赤んぼうの頭の上に手をおいて、ほほえみながらなめるだけで、幸せになるということにむねを打たれました。まずしい女の人をよるこんでほうもんするだけでじゅうぶんでした。うしなうものはなにもありません。不幸な人にいつもおだやかなときをささげるために働くことが必要でした。

何年かたって、戦争がはじまり、ほかの修道女は修道院から別のところに避難しましたが、テレサはコルカタにのこりました。このときに、いつもほうもんしていた生徒やまずしい人たちをもっとよく知ることができました。

1946年、テレサはダージリンへ行く汽車のなかで、「まずしい人たちを助け、その人たちと生きるために、ロレット修道院を去らなければならない」という神さまからのまねきの声を聞きました。テレサはいまの修道院を出て、いちばんまずしい人びとのために働く、新しい修道会をつくらなければならないということを理解しました。



神の愛の宣教者会

テレサの長上たちは、まずしい人々を助けるために働きたい、というテレサの願いを聞いてとてもおどろきました。テレサはめだたないふつうのシスターでした。しかも外国人なのに、まずしくて、きけんなスラム（貧民街）のかんきょうなかで、なにをしようとするのでしょうか？

しかし、テレサははっきりとした考えをもっていました。ただ、まずしい子どもたちを学校にこさせることが必要ではなくて、まずしい人々のなかに行くことが必要なのです、といました。

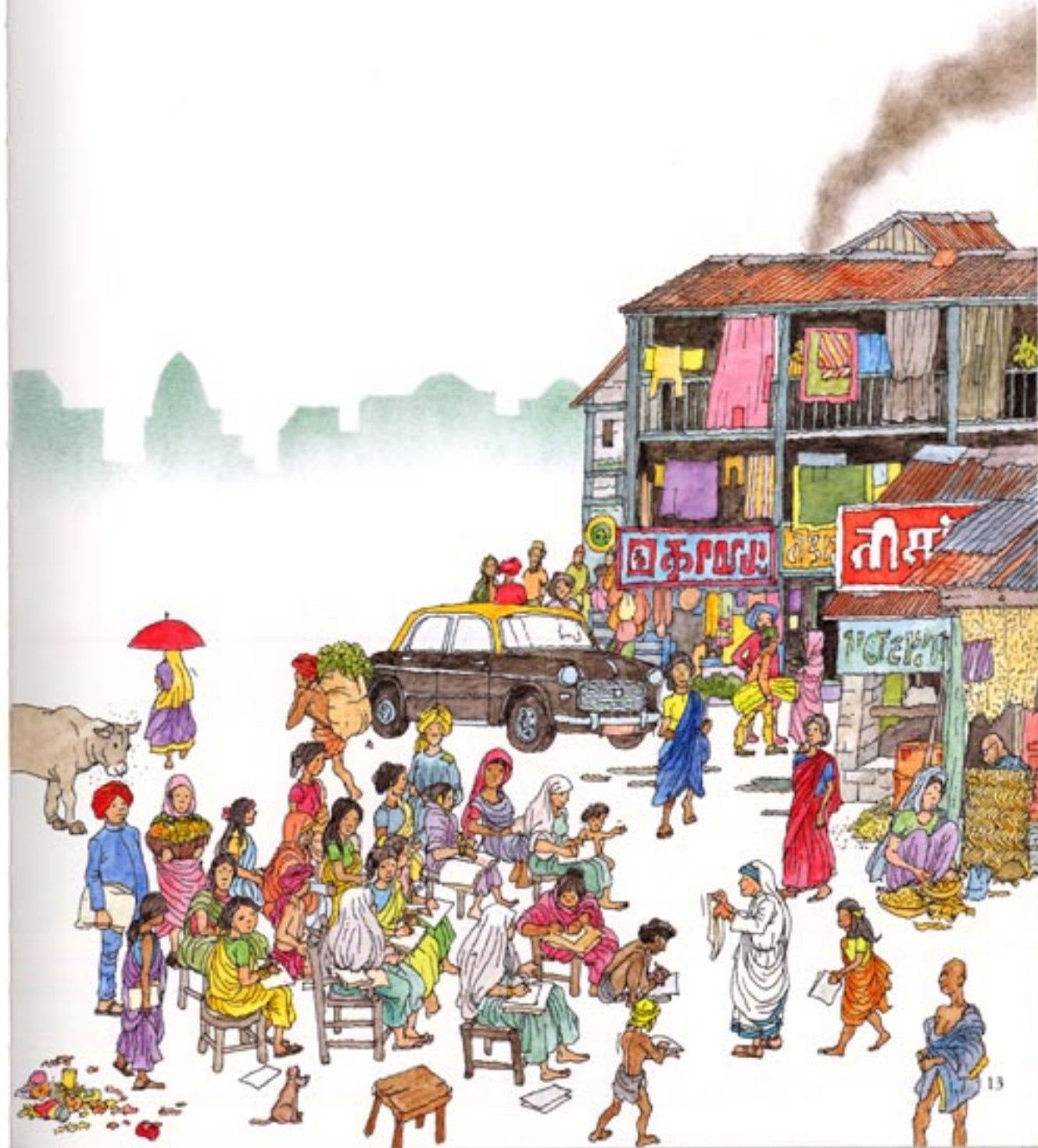
1948年8月16日の夕がた、テレサはロレット修道会の制服をぬぎ、青い線が入った白いサリーを着て、ひとりでコルカタの町に入っていました。

この新しい服は、テレサが地方のバザーに行ったときに買ったものです。とてもしっせんな生地で、インドの女性がふつうに着るサリーでした。3本の青い線のふちどりがしてありました。テレサはこれがとても気に入りました。この青色は聖母の色だったからです。

コルカタのモティディールというスラムの区域で、学校を開く許可をえました。学校は、バラックのあいだの小さな空き地でした。子どもたちはゴミの山にすわっていました。黒板は、どろ土の道路で、先生は、ほうきでアルファベットの文字を土の上に書いていました。

子どもたちは毎日ふえました。だれかが、わずかなお金をテレサに寄付したり、あるいは自分の仕事でテレサを助けるようになりました。テレサのそんざいは、日ごとに強く、見えるものになっていきました。

テレサのように、まずしい人を助けたいと志願する女性たちがやってきました。修道会として、正式に教会からみとめられるためには、会の目的やきそくが定められなければなりません。でも、まだ会のきそくというものはありませんでした。しだいに、いろいろなことが準備されていき、1950年10月に「神の愛の宣教者会」ができ、11人の若い女性がシスターになりました。



いつも走って

イスラム教を信じているコルカタの役人がいました。この役人はパキスタンに引っこすため、町にある自分の家を売ろうと考えていました。マザーテレサは、この家を買うことができるかとその人にたずねました。

この役人は信心ぶかい人でした。決心するまえに、深く考えました。家の前に行って、長いあいだじっとその家をながめ、そして、つぶやきました。「わたしはこの家を神さまからいただいた。神さまにそれを返そう」。そして、とても安い値段で、「神の愛の宣教女」たちにその家を売ったのです。

マザーテレサとシスターたちは、この建物に引っこしました。いまも修道会の母院となっています。町の中心にある道路に面し、とてもさわがしいとこ

ろです。車のこんごつや人のさげび声で、おいのりもかき消されてしまいます。でも、なんと広いこと！聖堂のための大きなへやや食堂がありました。マザーテレサが自分の仕事に使えるへやもありました。

宣教女たちの生活はいつも清貧（まずしく生きること）のきそくにしががっていました。サリーと一足のサンダル、十字架、ロザリオ、風や太陽から身を守るためのかさ、体をあらうためのブリキのバケツ、これだけがもっているすべてのものでした。

ときどき、これさえもないときがありました。こんな笑い話があります。ある日、ひとりのシスターのサンダルがこわれてしまいました。おくり物のなかに、赤い色で、かかとの細くとがったサンダルが

一足だけありました。シスターはこのサンダルをはいて、みんながおもしろそうに見ているなかを、ふらふらしながらミサに行ったのです。

毎日の生活は、おいのりと、助けを求めている人々への奉仕できびしいものでしたが、シスターたちはいつも楽しそうでした。コルカタの人たちは、「神の愛の宣教者会のシスターたちはいつも走っている」とじょうだんのように、いっていました。

わずかなお祝い日、とくにクリスマスには、食堂が色とりどりにかざられました。マザーテレサはシスターたちのために、色えんぴつや聖画像、おかしなどを準備しました。でも、いちばんすてきと思われたものはなんだったと思いますか？化粧せっけんです！

